

神戸徳洲会病院は2月24日、起立性調節障害(OD)をテーマに医療講演を行った。同疾患は、立ち上がった時に何らかの原因で血圧が低下し、上肢に血液が巡りにくくなる疾患。脳への血流が悪くなると、思考力低下や判断力低下、頭痛などが生じることがある。また心臓への血流が悪くなると、動悸や息切れ、倦怠感が、腹部への血流が悪くなると、腹痛や悪心、嘔吐などが起こることがある。とくに思春期の子どもに見られる疾患で、朝に起きづらくだらだらと布団の上で過ごすものの、午後になって元気になることもあり、「まるで急いでいるようですが、気合や根性だけでは、どうしようもない疾患の症状なのです」と泉井雅史・周産期センター長兼小児科部長。

思春期の子をもつ親ら真剣 起立性調節障害で医療講演

泉井・神戸病院センター長

泉井センター長が憂慮するのが、ブレインフォグと呼ばれる認知機能障害の症状と、起床困難の症状。新型コロナウイルスの後遺症として有名になったブレインフォグは、頭がぼんやりとしてしまい、集中して物事を考えることが難しくなるため、学業の遅れにもつながる。ODのなかで最も多い体位性頻脈症候群(POTS)138人(14歳〜29歳)のうち132人がブレインフォグを経験しているという研究結果を紹介。また、起床困難は遅刻や不登校につながり、結果として成績が落ちたり、両親や友人との関係性が悪くなったり、なかには学校を中退してしまう子もいるという。



「ふだんからソルトタブレットなど持ち歩き水分をよく摂るのもおすすめ」と泉井センター長

ODの治療は薬物療法が中心だが、日本で第一選択となっている薬剤が約20%の患者さんにしか効果がなかったとの報告もあり、「薬物療法だけでは治りにくい」と泉井センター長。一方、欧米では薬物療法とともに生理食塩水の静脈注射療法が盛んに行なわれていることを紹介し、「半数以上の方に効果があったとの報告もあり、当院では薬剤抵抗性のある難治ODには生理食塩水静注療法によるレスキュー的な使用も視野に入れていきます」。

泉井センター長自身、高校時代にODで苦しんだ経験があり、「ODは認知度が低く孤独な疾患です。治療には家庭、学校、病院がODを理解し、サポートすることが大切です」と訴えると、思春期の子をもつ親らは真剣な表情で聞いていた。同院にはODについて遠方からの問い合わせが多かったため、出張講演も検討している。

中嶋部長は、「若い方の乳がんが増えており、『可能なら自分の乳房や乳首を失いたくない、人工物を入れて後悔したくない』と、整容性の高い温存手術を希望される患者さんの期待に応えたい。長期予後に関しては、直達手術と比較しても同等

の乳がんが増えており、『可能なら自分の乳房や乳首を失いたくない、人工物を入れて後悔したくない』と、整容性の高い温存手術を希望される患者さんの期待に応えたい。長期予後に関しては、直達手術と比較しても同等

TMATがウクライナ難民支援クラウドファンディング開始!

NPO法人TMAT(徳洲会医療支援隊)はウクライナ難民支援のため、クラウドファンディングでの寄付金募集を開始した。ウクライナ隣国のモルドバ共和国にある団体を通じ、衛生資材や食料、医療物資などを支援するのが目的。募集期間は4月30日まで。詳細はホームページ(<https://congrant.com/project/npotmat/4461>)を参照。



根治性と整容性の追求に力

内視鏡補助下乳房温存手術を積極導入

野崎徳洲会病院・乳腺外科



「ほんの少し勇気をもって乳がん精密検査を」と中嶋部長

中嶋部長は「当院が位置する北河内地域には、豊富な経験と実績をもつ乳腺専門医や乳腺指導医が少なく、当科への期待は大きいと思います。地域の方々に最新・良質な医療を提供していきたいです」と意気込む。

乳がんの多くは浸潤がんであるため、適切な初期治療をしても数年が経過すると全身のあらゆる臓器に転移・再発する可能性がある。患者さんに最適な治療を提供するために、野崎病院乳腺外科は欧米の「がん治療の考

え方」を参考に、MUBC(Medical Union Overcoming Breast Cancer)という新しい診療組織形態での診断・手術・術後治療を目指している。MU(メディカルユニオン)は医師やスタッフ一人ひとりが、その分野のプロとして並列・迅速に機能し、良質で安全な医療を提供する。中嶋部長は「徳洲会グループには71病院あり、優秀な乳腺外科医師や消化器外科医師も多く在籍しています。近い将来、グループ全体で病院の枠にとらわれないMUが形成できたら、がんで苦しむ患者さんに大きな恩恵になると思います」と展望する。

は、相反する概念でもある「病理性の根治性」と「整容性の長期維持」の両立。従来の乳がん手術(直達手術)では、がんの存在する部位の直上皮膚を切開し、直接肉眼でがんを確かめて摘出するが、この術式では乳房皮膚表面に大きな傷が残る。そこで近年、根治性と整容性の両立を目的に、乳房温存手術や切除手術に多様な形成外科的技術を導入する「オンコプラスティックサージャリー」という概念が誕生した。これに用いる乳房再建用プレスト・インプラント(シリコン製人工乳房)とエキスパンダー(組織拡張器)は、13年7月に保険適用となった。エ

キスパンダーは乳房組織全体を拡張するためのもので、一定期間、乳房皮下や大胸筋下に埋め込むことで、その後のインプラント挿入が容易になる。また、再建術を行う時期によって、乳がん切除術と同時にを行う手術を「二次再建」、切除術後期間を置いて行う手術を「二次再建」と言い、エキスパンダーで皮膚を伸ばさずに1回で乳房を再建する方法を「一期再建」、あらかじめエキスパンダーを挿入し、時間を置いて2回目に人工乳房に入れ替える方法を「二期再建」と言う。

そこで中嶋部長は、乳がん治療にVABCSを積極導入。これは中腋窩線や乳輪縁の小切開から「HEROTECH」のアームを挿入し、内視鏡とLEDライトによる補助下で行う手術だ。ふだんは見えない場所、あるいは切開創が目立たない場所を切開する。小さな傷ですみ、出血量も少なく、回復が早いのも特徴。また、3cmを超える大きな乳がんの場合には、術前化学療法や術前ホルモン療法で腫瘍を十分に小さくしてからVABCSを行う。

中嶋部長は、「若い方の乳がんが増えており、『可能なら自分の乳房や乳首を失いたくない、人工物を入れて後悔したくない』と、整容性の高い温存手術を希望される患者さんの期待に応えたい。長期予後に関しては、直達手術と比較しても同等

であることを証明する多くの論文を欧米の一流誌に発表しています。もちろん日本語論文も同様です」と強調する。

整容性に関しては、切除後の残存乳腺と乳房の皮下脂肪の厚みに応じて独自の術式を考案。これまでの実績では、手術直後はもとより、その後何年間も左右対称の整容性を維持している。また、乳房の切除領域が大きく、残存乳腺だけでは整容性を確保できない場合も、人工物ではなく自家組織を用いた再建術を20年以上前から実施。中嶋部長が考案した広背筋脂肪弁が充実した広背筋脂肪弁の1本の手術創から「乳がん摘出と広背筋脂肪弁の同時充填再建術」が可能であるため、背中や臀部には傷が付かない。同院は昨年12月、日本乳房オンコプラスティッ

野崎徳洲会病院(大阪府)の中嶋啓雄・乳腺外科部長は2021年4月に入職し、「病理性の根治性と長期の整容性」を追求した乳がん治療に尽力している。そのため、手術では難易度が高く熟練を必要とする内視鏡補助下乳房温存手術(VABCS)を積極導入。同手術を安全で短時間に完結するための手術装置「HEROTECH」を開発(08年認可)、同装置の活用により、中腋窩線や乳輪縁の小切開から内視鏡補助下で安全かつ確実に乳がんを摘出し、乳房の整容性を長期に保つ種々の工夫を施すことを可能にしている。

は、相反する概念でもある「病理性の根治性」と「整容性の長期維持」の両立。従来の乳がん手術(直達手術)では、がんの存在する部位の直上皮膚を切開し、直接肉眼でがんを確かめて摘出するが、この術式では乳房皮膚表面に大きな傷が残る。そこで近年、根治性と整容性の両立を目的に、乳房温存手術や切除手術に多様な形成外科的技術を導入する「オンコプラスティックサージャリー」という概念が誕生した。これに用いる乳房再建用プレスト・インプラント(シリコン製人工乳房)とエキスパンダー(組織拡張器)は、13年7月に保険適用となった。エ

キスパンダーは乳房組織全体を拡張するためのもので、一定期間、乳房皮下や大胸筋下に埋め込むことで、その後のインプラント挿入が容易になる。また、再建術を行う時期によって、乳がん切除術と同時にを行う手術を「二次再建」、切除術後期間を置いて行う手術を「二次再建」と言い、エキスパンダーで皮膚を伸ばさずに1回で乳房を再建する方法を「一期再建」、あらかじめエキスパンダーを挿入し、時間を置いて2回目に人工乳房に入れ替える方法を「二期再建」と言う。

そこで中嶋部長は、乳がん治療にVABCSを積極導入。これは中腋窩線や乳輪縁の小切開から「HEROTECH」のアームを挿入し、内視鏡とLEDライトによる補助下で行う手術だ。ふだんは見えない場所、あるいは切開創が目立たない場所を切開する。小さな傷ですみ、出血量も少なく、回復が早いのも特徴。また、3cmを超える大きな乳がんの場合には、術前化学療法や術前ホルモン療法で腫瘍を十分に小さくしてからVABCSを行う。

名古屋病院看護部 患者さんとの“物語”で成長

ナラティブ発表会を開催

名古屋徳洲会総合病院看護部は2月15日、ナラティブ発表会を開催した。看護部が患者さんに対する経験を振り返り、自ら語ったり他者の発表を聞いたりすることで、患者さんとの良好な関係づくりや看護観の醸成に結び付けるのが狙い。毎年行い、看護部が定めるラダーレベル1の看護師が対象。今回は2021年に入職した43人(新卒42人、既卒1人)が発表した。コロナ禍のためオンライン参加も加えたハイブリッド形式を初採用。発表者の卒業校教員らがWEBで見守るなど、院外からの参加も初めて試みた。

発表者は、それぞれ患者さんとのエピソードを披露しながら、患者さんへの対応を省みたり、看護に対する思い、今後の目標などを吐露したりした。細谷実未看護師は「振り返りで気付いたこの気持ちを忘れず、2年目からも頑張ります」と笑顔。オンライン参加の教員からは「先輩看護師や患者さんに支えられながら着実に成長している様子が伝わる発表会でした」、「卒業生の成長が見守れる機会をいただけることは、本校の喜びでもあります」と声が聞かれた。馬田美幸・看護部長は「卒業校の先生方をご招待する企画は以前から考えていました。一緒に成長を喜ぶことができますし、私たちの教育に対する理解も深まると考えています。今後は「多職種連携が重要になるなか、交流する機会になれば」と、同期入職の他職種による発表も検討中だ。



発表者を含め92人が参加